



Altus

WIENER PHILHARMONIKER
Live Recording Edition 21



Riccardo
Muti

Beethoven
Symphony No. 3

Haydn
Symphony No. 48

1992 Live

**WIENER
PHILHARMONIKER**



WIENER PHILHARMONIKER
Live Recording Edition 21

CD 1

ハイドン

Franz Joseph Haydn 1732- 1809

交響曲第48番 ハ長調「マリア・テレジア」Hob.I:48

Symphony No. 48 in C major, Hob.I:48, "Maria Theresia"

Sinfonie Nr. 48 C-Dur Hob.I:48, "Maria Theresia"

- 1 I. Allegro 8:33
- 2 II. Adagio 9:29
- 3 III. Menuetto: Allegretto 5:06
- 4 IV. Finale: Allegro 3:31

CD 2

ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven 1770- 1827

交響曲第3番変ホ長調『英雄』Op.55

Symphony No. 3 in E flat Major Op. 55

Sinfonie Nr. 3 Es-dur, Op. 55

- 1 I. Allegro con brio 19:35
- 2 II. Marcia funebre. Adagio assai 17:48
- 3 III. Scherzo. Allegro vivace 5:58
- 4 IV. Finale. Allegro molto 13:00

リッカルド・ムーティ(指揮)

Riccardo Muti

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

WIENER PHILHARMONIKER

1992年6月21日: ムジークフェラインザール オーストリア放送協会によるライブ録音

Live: 21.6. 1992 Wien, Großer Musikvereinsaal

Aufnahme: Österreichischer Rundfunk / Archiv des Österreichischen Rundfunks ORF

2CD

ヘッツェルの入団秘話

紺戸 淳

指揮者と演奏者との関係から見て、今日「どんな無理な要求でも、全部完璧に演奏して見せますよ」というスタンスをとるオーケストラがほとんどという中で、ウィーン・フィルは過去から今日に至るまで、指揮者に向ける「自分たちは音楽をこうしたい」という欲求の圧倒的に強いオーケストラである。コンサートマスターのキュッヒルが、あるインタビューでの「良い指揮者とは?」という質問に対し、「私たちの音楽を邪魔しない指揮者」と言い放ったエピソードは、このオーケストラの性格を端的に余すことなく語っている。多少の誇張もあるだろうが、実際ウィーン・フィルの団員の大部分は、「指揮者には従うもの」とはまったく考えていないらしい。ひどい人に言わせると、「指揮者は仕事を時間どおりに終わらせるための整理人」だそうである。つまり、音楽をやっているのは自分たちの方だと。では、この主張はいったい誰が指揮者に告げるのだろうか? 実は、これこそがコンサートマスターの仕事にはかならない。代々のコンサートマスターは、オーケストラを代表してウィーン・フィルがウィーン・フィルであるための主張を、日ごと夜ごと全身で壇上の指揮者にぶつけてきたのである。

ウィーン・フィルの名コンサートマスターとして今もって語り継がれるゲアハルト・ヘッツェルが、山の事故で帰らぬ人となったのは、1992年の夏のことであった。このヘッツェルがウィーンに登場することとなった背景は、その後の名声に比べて世に余り知られてはいない。

ウィーン・フィルは第二次世界大戦後、長いことコンサートマスター不足に悩まされ続けてきた。シュナイダーハンは早々に退団、バリリは右腕の疾患による演奏制限、セドラックは気づいたら70歳に近い高齢、ひとり残ったボスコフスキーは、いやでも孤軍奮闘を強いられオーバークラッシュ寸前にまでなる。何としてもウィーンに育った生粋のコンサートマスターが欲しい! それは当時のウィーン・フィルの執念でもあった。

そして、そして待ちに待った若き星、ウェラーの登場。これで自分たちの将来は永く安泰、と誰もが安堵の胸をなでおろしたのも束の間、何んと当のウェラーがその重責に耐えかねて、わずか30歳でリタイアしてしまった。関係者は誰もが皆、目の前が真っ暗になったことであろう。自分たちの音楽的主張を代表してくれるコンサートマスターは、もうこの世には現れないのか？

そこへベームがヘッツェルを紹介してきた。1969年のことである。ヘッツェルはシュナイダーハンの薫陶をスイスのルツェルンで受け、1961年のミュンヘン・コンクール第3位に輝く経歴を持っていたが、ユーゴスラヴィア生まれで前任はベルリン放送交響楽団のコンサートマスターであったなど、当時ウィーンでは、とてもではないが自分たちの仲間のヴァイオリニストとは見なされていなかったらしい。加えてベームのそれが、紹介とは名ばかりのかなり強引な押し込みだったことも手伝い、ヘッツェルへの反発はかなり広がった。今度のコンサートマスター候補に、われわれの音楽的主張を代表する資格があるのか？そして、指揮者と対峙するだけのウィーンの音楽的資質を持ち合わせているのか？というわけである。ウィーン出身でないコンサートマスターを受け入れることは、自分たちに脈々と受け継がれてきた音楽的アイデンティティを失うことにつながりかねない。この迷いは多くの団員の動揺を招いたに違いない。しかしながら、紆余曲折はあったものの、1969年10月に（どうやら試用期間はなしで）ヘッツェルはウィーン・フィルのコンサートマスターに就任したのである。

後日、ウィーンにて筆者にこのような話を伝えてくれた関係者がいた。

「ヘッツェルがやってきたときは、そりゃヒドかった。現状だけで考えたら間違いなく使えなかったよ。でも俺たちはヤツの今ではなく“将来”を買ったんだ。こりゃ鍛えりゃモノになるとね。ところが入れて見たら、その途端にバリリもシヴォー（ウェラーと同時にコンサートマスターに就任したヴァイオリニスト）もやめちまって、本人もそりゃアワ食ったんだろうね。目の色を変えて練習を始めた。そしてこれと前後して、俺たちが鍛え役を買おうと、ヒューブナーとシュトレック（ともに長老といえるような、当時の第2ヴァイオリン—のちに楽団長—とヴィオラのソロ奏者）が自分たちの室内アンサンブ

ルにヘッツェルを引っ張り込んだんだ。基礎から徹底的にやった。そしたらよっぽど厳しかったのか、3年でモノになったね。」

また筆者は、この室内アンサンブルが70年代前半に来日したとき、その演奏会直前のゲネプロ（総合練習）に実際に立ち会った人から、次のような話を聞かされたことがある。

「会場に入ったら、あと数時間で本番だというのに何んと若いチェロ奏者がひとりでロングトーン（左手は弦を押さえず、弓を持った右手だけで長い音の発音練習をすること）をさせられていて、楽器を床に置いたヒューブナーとシュトレックが、2人して苦虫を噛み潰したような顔で「Nicht ... nicht！（だめ、だめ！）」と言っているんだよ。本番直前だよ。ヘッツェルは、息を呑んだまま前かがみになってピクリとも動かない。ありゃその前に同じことさせられていたんじゃないのかなあ。」

恐らくヘッツェルの鍛え役を買って出た団員は、この2人だけではあるまい。ウィーンの音楽的アイデンティティの行方に危機感を募らせ、同時にヘッツェルの将来にそれを賭けた人々の逸話は、いくつも伝承されている。

「コンサートマスターを鍛える！」本当だとしたら（筆者は多分本当だと思っている。）ウィーン・フィルの教育システムは、いかなるメソッドにも負けない世界随一のものであるといえるだろう。

こうしてヘッツェルは、数年の間に急速な成長を遂げ、70年代の中頃にはみごとウィーンの音楽的主張を代表する、押しも押されもせぬ名コンサートマスターへと変貌していったのである。

このCDにおいて聴けるムーティとの演奏会は、1992年6月。当日を担当したコンサートマスターが誰であったのか、正確な記録は詳らかでない。しかし、その後の運命を知らないヘッツェルが、最後の光芒を放っていた時期にあたる。

そのヘッツェルが突然になくなった。そうしたら、今度はキュッヒルとピンク（ともにコンサートマスター）の目の色が急に変わったそうである。ヘッツェルは、自身が周囲に鍛え上げられたことで、ウィーン・フィルのコンサートマスターのあり方を、今一度はしっかりと示したといえるのではないだろうか。